

我が職場の安全活動の工夫と取り組み

(ワンタッチベルトによる鉈の着装とハチさされ対策について)

岡崎宮林署豊橋担当区基幹作業職員 ○伊藤 銀 朗
基幹作業職員 岩 月 重 一

1. はじめに

豊橋担当区班は、基幹作業職員2名だけの少人数で造林事業等を実行している。私達現場の職員は、安全の確保は日常業務の円滑な遂行に直接結びつくものと考えており、日頃からどんな小さな事にも工夫して取り組んでいる。その中から、現在安全対策で問題となっている刃物災害とハチ災害について取り組んだので報告する。

2. ワンタッチベルトによるナタの着装

我々山で働く者にとって、一番身近な道具である鉈の着装は、一般的には紐あるいは皮バンドが利用されて来た。しかし、次のような欠点や煩わしさがあった。

- ア. 長時間、付けていると紐が緩んでくる。
- イ. 紐が細いため、腹に喰い込み痛くなる。
- ウ. 降雨等で濡れた場合、紐が乾きにくい。
- エ. 耐久性が悪く、半年～1年での交換が必要である。

(1) シートベルトの改良

車のシートベルトの脱着装置が、鉈のベルトに改良できないものかと考え廃車された車のシートベルトを利用することを考えた。

最初に考案したものは、(図-1参照)シートベルトの車体取付部と鞘を布紐で縛りつけ、ワンタッチで着装できる簡単な方法であったが、欠点として

- ア. 腰にぴったり着装するので鞘が身体に密着し遊びが無く、鉈の抜き差しが困難となる。

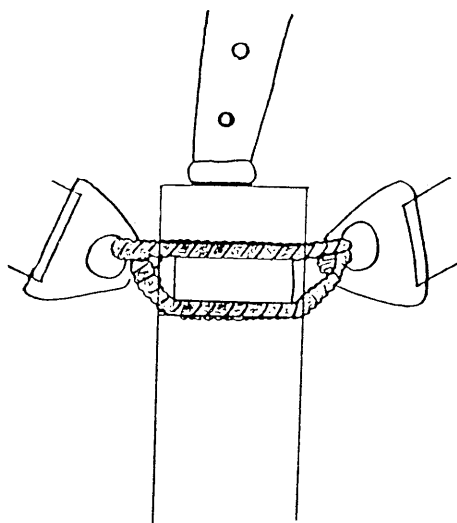


図-1 布紐による取付方法

- イ. 遊びをつくるために、緩めに締めると下がる。
- ウ. 取り付け部が布紐のため、耐久性が悪い。
- エ. 伸縮調節ベルトに自然に緩みがくる。

(2) 改良型の考案

この欠点を取り除くため、改良型を考案した。

ア. 凸ベルト㉗と凹ベルト

㉗を他のベルト㉖で継ぎ合せワンタッチベルト本体とし、鉤に遊びをもたせた。(図-2参照)

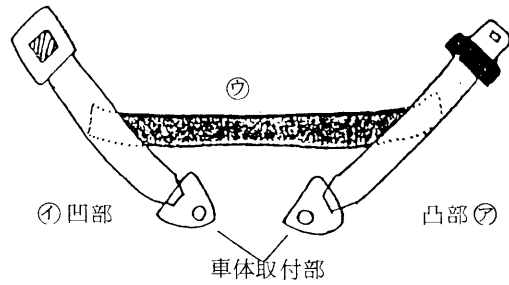
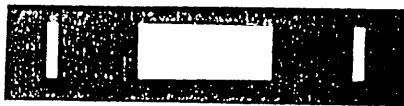


図-2 ベルトとベルトを継ぎ合わせる

- イ. 鞆の固定には、ベルトを10cmに切断し、中央に鞆の突起部分形に穴をあけたもの㉘と合成樹脂製の板㉙とで鞆をはさみ、

両端をボルトと割ピン㉚によりシートベルトの金部と止めることとした。(図-3参照)



㉘ シートベルト生地



㉙ 合成樹脂



㉚ 割ピン・ナット

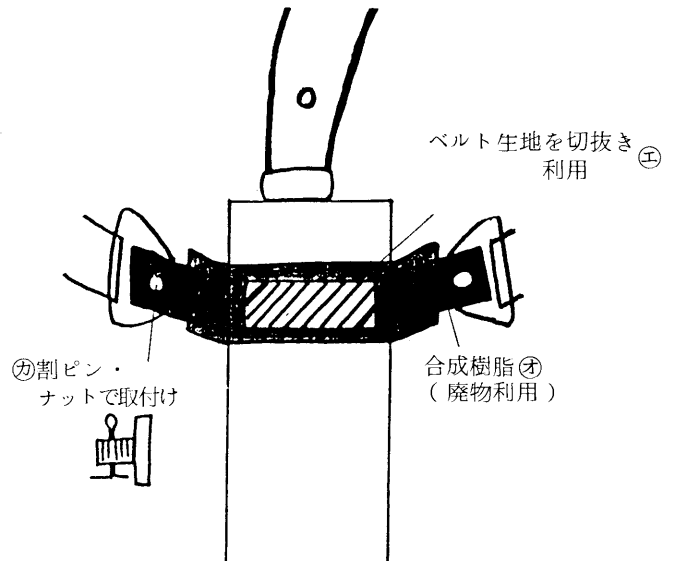


図-3 ベルトによる取付方法

ウ. ワンタッチベルトのすそをカーテンの止め金で、はさみ緩みを止めた。

現在は、この改良型のワンタッチベルトを利用している。

(3) 結果

ア. 脱着が容易で、腰への固定がしっかりする。

イ. ベルトが柔らかく、腰になじみしっかり締めても腰部に負担を感じない。

ウ. 化繊であるため雨等に濡れても乾きが早く、又、汗が染みてもベトつかない。

エ. 耐久性に優れており、3年を経た現在も使用中である。

オ. ベルトと鞘に遊びができ、抜き差しが容易である。

表一 1 布紐と改良型の比較表

	布 紐	改 良 型
長時間使用した場合	ゆるんてくる	ゆるまない
腰部への当り具合	喰い込み痛い	喰い込まない
雨に濡れた場合	乾きにくい	乾きやすい
耐 久 性	半年～1年	3年以上

以上のような成果があり、大変使いやすいものとなった。

3. ハチさされ防止対策

夏山での災害で心配なものの中に、蜂さされがある。今年度ヒヤリハット事故通報でも3件の蜂さされが出たが、幸い軽い程度のもので済んだ。しかし、他局では、死亡にまで至るケースもあり甘くみることはできず、日頃からハチ対策については、十分備えておく必要がある。又、現場で作業する我々ばかりでなく、当担当区には、闇刈溪谷等入込者の多い所もあり防止する必要性のあることから、我々の現場に適した方法として次のことを検討し実施した。

(1) ハチ捕獲ビンの設置(図一4参照)

ジュースのアキビンに、ジュースの残りを少々入れておくとハチがビンの中に入り、外へ出られなくなり1日当り10～20匹程度は簡単に捕獲することができる。

(2) ハチ撃退スプレーの連帯

作業中は必ず携帯し、単独で行動しているハチ、あるいは小さな巣の撃退には十分効果がある。

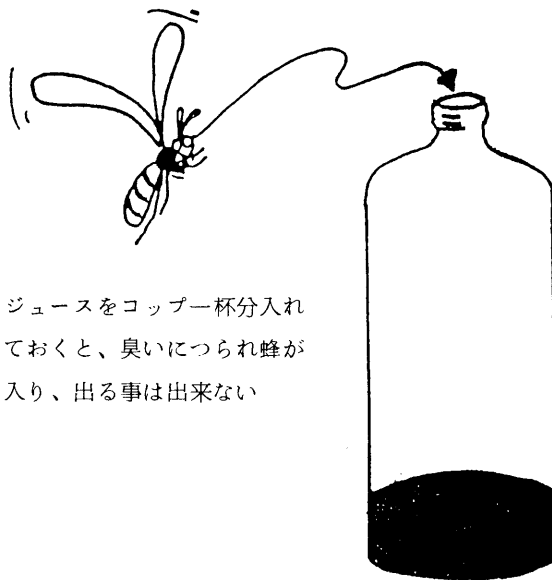


図-4 ハチ捕獲ビン の設置

(3) ハチ薬の携帯

飲薬、塗り薬、吸い出し器具があり、刺されてすぐ使用すると効果があるので、小型のウェストバックに入れ、常に携帯している。小型で軽量なので作業中も支障がない。

(4) ハチアミの使用

着用時の視界の悪さ、煩わしさはあるが、作業地には必ず携帯し使用している。

以上のような対策を行っているが、ハチさされ対策については、これと言った決め手がないものの危険性が高いことから、さらに確実性の高い防止対策の研究をする必要がある。

4. ま と め

以上の2つの取り組みは、廃物又は手近にある物を利用したもので、まだまだ改良工夫する必要性を感じており、さらに創意工夫し、使いやすいものにしていかなければならない。このような日常業務の小さな工夫が安全作業の確保、また、安全意識の高揚につながるものと考えており、今後も、どんな小さなことでも工夫し、安全で効率的な作業に結びつくよう取り組んでいきたい。